



トルストイ ★

アンナ・カレーニナ

世界文學大系

37

筑摩書房版

世界文学大系 37

トルストイ ★



昭和 33 年 8 月 10 日 発行

定価 450 円

訳 者 米 川 正 夫

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町208
振替東京 165768 電話(29)局7651

目次

アンナ・カレリーニナ

米川正夫訳 5

アンナ・カレリーニナ論

トーマス・マウンテン
大田一訳 582

解説

網野菊 593

裝
幀
庫
田
發

ト
ル
ス
ト
イ
★

アンナ・カレーニナ

復讐は我にあり、我これを与えん

第一編

一

すべて幸福な家庭は互に似かよっているが、不幸な家庭はそれぞれに不幸の趣きを異にしているものである。

オブロンスキイ家では何もかもがごった返しであった。良人が、かつてわが家にいた家庭教師のフランス女と関係していることを知った妻は、もう一つ屋根の下に暮すことはできない、といひだしたのである。この状態はもう三日も続いて、当の夫婦は互に及ばず、家族一同から召使にいたるまで、ひととそれを身を感じた。家族のものも召使も、自分たちの共同生活には意味がない、どんな旅館にたまたま寄り会った人たちでも、自分らすなわちオブロンスキイ家の家族や召使よりも、互の繋がりが多いほどだ、といったふうの感じをもっていた。妻は自分の

居間から出てこないし、良人はもう一昨日から家よりつかなくなかつたし、子供らは迷子のようになじゅうを駆けまわっていた。家庭教師のイギリス婦人は家政婦と喧嘩をして、どこか新しい口を見つけてはしいと友だちに手紙を出した。料理人はもう昨日から、食事時分をねらつて、ふらりと出てしまった。台所女と馱者は暇をくれといひだした。

一昨日、二人で喧嘩したあと、ステエバン・アルカージツチ・オブロンスキイ——社交界の呼び方に従えば、スチーヴアは、いつもの時刻つまり午前八時に、妻の寝室でなく自分の書斎の、モロッコ革の長椅子の上で目をさました。彼は長椅子のバネの上で、手入れのよくゆきとどいた肥りじしの体を、くるりと捻じ向けて、もう一度ぐつすりひと寝入りするつもりらしく、クツションの反対側をぎゅつと抱きしめて、片頬をすりつけたが、ふいにぱつと跳ね起きて、長椅子の上に坐り、眼を開いた。

『ええと、ええと、あれはいったいどうだったわけかなあ？』と彼は夢を思い起しながら考えた。『ええと、どうだったわけ？ そうだ！ アラービンがダルムシュタットで一席設けたんだ。いや、ダルムシュタットじゃない、何かアメリカ風のところだったわけ。そう、しかし、夢の中じゃダルムシュタットがアメリカにあつたんだ。そして、アラービンはガラスのテーブルでござりして——そのテーブルが *Mio table* (わが貴きもの) を歌つたわけ。いや、*Mio teatro* じゃない。もっといいものだった。

それから、なんだかちっちゃなフラスコが並んで、それがみんな女なんだ』と彼は追憶にふけるのであつた。

オブロンスキイの眼は柔しげに輝きました。彼は微笑を浮べたまま、物思いに落ちていった。『そうだ、いい気持だった、本当にいい気持だった。まだいろいろすばらしいことがあつたんだが、言葉でも思想でも捉えようがない。だいいち、うつつには表現のしようがありません』ふと、ラシヤの窓掛の横から射しこんでいる光の縞に気がつくくと、彼は元氣そうに両脚を長椅子からおろして、妻の手になる刺繍入りの上靴を探りあてた。それは去年の誕生日の贈り物で、金いろがかつたモロッコ革の飾りがついていた。それから、九年来の長い習慣で、自分の寝室のいつもガウンのかかつている場所へ、坐つたままで手を伸ばした。と、その時はじめて、なぜ、どういうわけで自分が妻の寝室でなく、書斎なんか寝ているか、ということをとっさに思い出した。微笑が顔から消え、彼は額に皺をよせた。

『ああ、ああ、ああ！ ああ！……』いっさいのことを思い浮べて、彼は唸るようにならう。すると、彼の想像にはまたしても妻とのいさかひの一部始終、進退きままつた自分の立場が、はつきりと映ってきた。わけても苦しいのは、自分が悪いという自覚であつた。

『そうだ！ あれは赦してくれやしない、また赦すことなどできないのだ。何よりも恐ろしいのは、いっさいの原因がこれでおれでありながら、

別におれが悪くはないということだ。そこにいいさのドラマがあるのだ」と彼は考えた。「ああ、ああ、ああ！」あのいさかいの中で、特に苦しかった二三の印象を思い起しながら、彼は絶望したようにこんなことを口走った。

なによりも不愉快だったのは、最初の瞬間である。彼は浮きうきし満ち足りた気分芝居から帰ると、妻へ土産の大きな梨を持って客間へ入ったところ、そこに妻の姿が見あたらず、驚いたことには、書斎にもいなかった。最後に妻の寢室へ行ってみると、彼女はいっさいを暴露したあの不運な手紙を手に持っていたのだ。

彼女——いつも何か忙しそうにあたふたしている、彼の考えによればたいして頭がよくないドリイが、手紙を手にしてじつと坐っていたが、恐怖と絶望と憤怒の表情で良人を見すえた。

「これはなんですか？ これは？」と手紙を指さしながら問いかけた。

この時のことを思い出すと、よくあることだけれども、事柄そのものよりも、妻の問いに対する自分の返事のしかたのほうが、よけいにオプロンスキイを苦しめたのである。

その瞬間、彼は何かあまりにも恥ずべき事を摘発された人がやるのと、同じようなことをしたのである。彼は自分の罪を暴かれた以上、妻に対して苦しい位置に立たされたわけであるが、その位置にふさわしいような顔つきを、うまく取りつくりることができなかった。憤然として否定し、解明するなり、赦しを乞うなり、あるいはむしろ平然としていけばよいものを——そ

のほうで彼のしたことには比べれば、まだまだだったろう——彼の顔は全く無意識に（『脳神経の反射作用だ』と、生理学の好きなオプロンスキイは考えた）、全く無意識に、持ち前の善良な、したがって愚かしい笑い方で、ついにやっとなつてしまったのである。

この愚かしい微笑だけは、彼もわれながら赦すことができなかった。この微笑を見るやいなや、ドリイはまるで肉体的に痛みでも感じたかのように、ぎくつと一つ身を揉ませ、熱し易い気性に任せて、ひどい言葉を雨霰と浴びせかけたうえ、ぶいど部屋を駆け出してしまった。それ以来、彼女は良人の顔を見るのもいやだとい

いだしたのである。

『あのばかけた微笑がいっさいのもとなんだ』とオプロンスキイは考えた。

『しかし、どうしたらいいのだろうか？ どうしたら？』と彼は絶望の念をいだきながらひとりごちたが、答えを見出すことができなかった。

二

ステェベン・アルカージツチ・オプロンスキイは、おのれ自身に対しては正直な男であった。われとわが身を欺いて、おれは自分のした事を後悔している、などと無理に考えることはできなかった。当年とって三十四歳、美男子ではなかった。二人の死んだ子を合わせれば七人の子供の母親であり、自分より一つしか年の若くない妻に首つただけでなかったからといって、今さ

ら後悔などするわけにはいかない。彼はただうまく隠さなかった点だけを後悔していたのである。とはいうものの、彼は自分の立場の苦しきは十分に感じていたし、妻や子供や自分自身をかわりそうに思っていた。この事件がこれほど強い打撃を妻に与えると知っていたら、彼も自分の罪をもっと上手に隠しおうせたかもしれない。彼は一度もこの問題をはっきりと考えたことはないけれども、なんだか妻はだいたい前から良人の浮気を感じている気がぼんやりとしていたのである。それどころか、妻はもう年をとって、しなびて、器量も悪くなり、おまけにこれというところもなく、ただ善良な母親であり、一家の主婦であるというばかり、平々凡々の女であるから、公平に見たところ、もつと謙遜であつてしかるべきもののように思われる。ところが、事實はまるで反対だったのである。

『ああ、恐ろしい！ やれ、やれ、やれ！ 恐ろしいことだ！』とくりかえすばかりで、オプロンスキイは何一つ考えつくことができなかった。『しかも、これまでは実にうまくいってたんだがなあ、みんな気持のいい暮しをしてたんだがなあ！ 女房は子供に満足して幸福だったし、おれも何一つじやまをせず、子供のせわも家事のめんどうも、すっかりあれの気まかせにしてたんだがなあ。もつとも、彼女が家庭教師として家に住みこんでいたのはよくなかった。わが家の家庭教師の尻を追いまわすということには、何か卑しい俗なところがあるからな。しかし、

家庭教師とひと口にいつても！（彼はローラ嬢の悪戯いたづらっ子らしい黒い瞳と、その微笑をまざまざと思い浮べた）。だが、なんといつても、あの女が家にいる間は、おれはあえて手を出さうとしなかった。何よりもいけないのは、あの女がもう……いつたいどうしたことなんだ、なにもかまがるでわざとみたいに！ やれ、やれ、やれ！ しかし、どうしたもんだらう、いつたいどうしたもんだらう？」

答えはなかった、あるのはただすべて複雑をきわめた解決不能な問題にたいして、生活が与えてくれるあの一般的な答えばかりだった。その答えというのとはほかでもない、その日その日の要求に従って生きていけ、換言すれば、忘れてしまえ、ということであつた。もう眠りによつて忘れることは、少なくとも夜がくるまで不可能である。もうあのフラスコの女が歌つた音楽に帰って行くわけにはいかない。してみると、生活の夢の中に忘却を求めねばならぬ。

『まあ、どうなるか先でわかるだらう』とオプロンスキイはひとりごちて、立ちあがり、浅黄あさぎの絹裏のついた鼠色の部屋着をひっかけ、紐を結んで、広い胸郭に思うぞんぶん空気を吸いこみ、元気のいい足どりで（いくらか、がに股のその足は、彼の肥満した体をいとも軽々と運ぶのであつた）、窓に近より、カーテンを上げて、高々とベルを鳴らした。ベルの響きに応じて、古い親友である侍僕頭のマトヴェイが、服と靴と電報を持ってさっそくはいってきた。マトヴェイのうしろから、理髪師が頼たのり道具を用意

して入ってきた。

「役所から書類がきてるかい？」電報をとって、鏡の前に腰をおろしながら、オプロンスキイはたずねた。

「テーブルの上にございます」とマトヴェイは同情をこめたまなざしで、物問いたげに主人をちらと見て、こう答えた。それから少し待って、ずるそうな微笑を浮かべながらつけ加えた。「貸馬車屋の親父が、使のものをよこしてまいりました」

オプロンスキイはなんにも返事をしないで、ただ鏡に映るマトヴェイの顔をちらりと見やつた。鏡の中で出会つた二人の視線から察するところ、彼らはお互に腹をのみこみあっているらしかった。オプロンスキイの目つきは、『なんだってそんなことをいうんだい？ おまえわかっているはずじゃないか？』ときいているようであつた。

マトヴェイはジャケツのポケットに両手をつつこみ、片足をうしろへ引いて、無言のまま、人のいい顔つきで、あるかなきかの微笑を浮かべながら、主人の顔を見つめていた。

「わたくしはこの次の日曜にこいと申しつけました。そして、それまでは旦那さまのおじやまをしたり、自分でもむだ足を踏んだりしないようにと申しました」と彼はいつたが、明らかに用意しておいた文句らしかった。

オプロンスキイは、ははあ、これはマトヴェイのやつちよつとおつなまねをして、おれの注意をひこうとしたのだな、と悟つた。電報の封

を切つて、例のごとくまぢがった言葉を想像でなおしながら読み終ると、彼の顔はぱつと明るくなった。

「マトヴェイ、妹が、アンナ・アルカージェエナが、明日やってくるよ」長いふさふさとした頬髯ほくそのあいだに、バラ色の道をあけていた理髪師のふつくりとつやつやした手を、ちよつとおしとどめながら彼はこういつた。

「ありがたいことだ」とマトヴェイはいつたが、自分も旦那さまと同様に、この知らせの意義を理解している。つまり、旦那さまのお気に入りお気に入りの妹アンナ・アルカージェエナなら、夫婦喧嘩の仲裁に力になつて下さるだらうということ、この返事で暗示したのである。

「お一人でございませうか、それともおふたかたお揃いで？」とマトヴェイはきいた。

オプロンスキイはものがいえなかつた。というの、理髪師が上唇を剃つていたからである。そこで、彼は指を一本出して見せた。マトヴェイは鏡にむかつてうなずいた。

「お一人で。では、お二階のほうにご用意いたしまししょうか？」

「奥さまに伺つてみる、どこかおっしゃるだらう」

「奥さまに？」と、何か疑わしげにマトヴェイはくりかえした。

「そうだ、伺つてみるんだ。それから、この電報を持っていつてお渡ししろ、なんとおっしゃるか」

『ためしてごらんにならうというのだな』とマ

トヴェイは合点して、ただ「かしこまりました」とだけいった。

マトヴェイが靴をききませてゆるゆると歩きながら、電報を手に書斎へ帰ってきたとき、オプロンスキイはもうちゃんと洗面をすまし、頭もきれいに梳き上げて、これから着替えをしようというところであった。理髪師はもう部屋にいなかった。

「奥さまはもう出ていくから、なんでもあの人の、つまり旦那さまのお好きなようになさるようにと、そうご返事申しあげるとおっしゃいました」とマトヴェイは目だけで笑いながらそういうと、両手をポケットへつつこみ、首をわきへ傾けながら、じつと主人に目をすえた。オプロンスキイはちよつとだまっていた。ややあつて、いかにも人のよきそうな、いくらか惨めな感じのする微笑が、その美しい顔に浮んだ。「おい、マトヴェイ？」と彼は小首をひねりながらいった。

「なに、大丈夫でございますよ、旦那さま、しぜんと丸くおさまりますで」とマトヴェイはいった。

「丸くおさまる？」

「さようでございますとも」

「おまえそう思うかい？ おい、だれだい、そこにいるのは？」戸の外に女の衣きずれの音を聞きつけて、オプロンスキイは声をかけた。

「わたくしでございます」というしつかりした、気持のいい女の声がしたと思うと、戸の陰から保母のマトリョーナ・フィリモノワナのいか

つい、あばたの顔がぬつとのぞいた。

「なんだね、え、マトリョーナ？」とオプロンスキイは、戸口の方へ出て行きながらたずねた。オプロンスキイは、妻にたいして一も二もなく申しわけのないことをしたのであり、彼自身もそう感じていながらもかわらず、家じゅうのほとんどすべてのものが、ダーリヤ・アレクサンドロワナの無二の親友である保母までが、旦那さまの味方なのであった。

「え、なんだね？」と彼は勢いのない声でうなされた。

「旦那さま、もういっぺんいらして、おわびをなさいませ。なんとかなると思いますから。奥さまは、見る目もおいたわしいほど苦しんでいらつしやいますし、それに家の中もまるでんやわんやでございます。だいいち、旦那さま、お子たちもかわいそうと思っておあげにならなければ。おわびをなさいませ、旦那さま。どうもいたしかたがございません、詩いた種は……」

「しかし、入れてくれなだるう……」

「まあ、するだけのことをなさってごらんなさいませ。神さまはお慈悲ぶこうでございますから、神さまにお祈りなさるんでございますね、旦那さま！ 神さまにお祈りなさいませ」

「ああ、よしよし、あつちへいきなさい」とオプロンスキイはふいに顔を赤らめて、こういった。「うん、それじゃ着替えをさしてくれ」と彼はマトヴェイの方へふりむくと、思いきりよく部屋着を脱ぎすてた。

マトヴェイは馬の頭輪のようなかっこうにしらえて、もうちゃんと用意しておいたシャツを拵けて、目には見えない埃を吹きながら待っていたが、さも満足らしい様子で、手入れのよくとどいた主人の体にすつぽりかぶせた。

三

着替えを終ると、オプロンスキイは香水を吹きかけ、ワイシャツの袖をなおし、慣れた手つきでタバコや、紙入れや、マツチャ、二重の鎖と小飾りのついた時計をほうほうのポケットへ突っこんで、さつとハンカチをひと振りすると、例の不幸があるにもかかわらず、自分という人間がさつぱりと清潔で、気持のいい香りを放ち、肉体的にも健康で、愉快な存在のように感じながら、一歩ごとに軽く身をふるわせて、食堂へ入っていった。そこにはもうコーヒーが彼を待っており、コーヒーのそばには手紙と、役所の書類が置いてあった。

彼は手紙に目を通した。その一通ははなはだ不快な手紙で、妻の領地の森を買おうとしている商人からきたものであった。この森はどうしても売らなければならぬ事情になっていたが、今は妻と仲なおりができるまでは、そういうことは問題外であった。何よりもいやなのは、そのために目前に控えている妻との和解に、金銭上の利害関係が介入することであった。自分はその利害関係に左右されるかもしれない、この森を売りたいがために妻との和解を求め、彼らなどと考えると——そう考えただけでも、彼は

侮辱を感じるのであった。

手紙を読み終ると、オプロンスキイは役所の書類をひきよせて、手早くページをめくって、二つの事件に目を通し、太い鉛筆でいくつかの印しをつけ、書類をわきへおしやって、コーヒーに手をかけた。コーヒーを飲みながら、まだ湿りけのある朝刊新聞を広げて、読みはじめた。オプロンスキイが購読していたのは、自由主義の新聞であつたけれども、それは極端な立場に立っているのではなく、大多数の人々がいっている程度の自由主義であつた。彼は科学にも芸術にも、政治にも、べつだん興味をいだいてるわけではなかつたが、これらのものだけにたいして、大多数の人がもっているのとおなじ見解をもち、大多数の人が変えるときだけその見解を変えた、というより、彼が変えたのでなく、見解のほうに彼の内部で自然と変つていくのであつた。

オプロンスキイは、主義も見解も選んだことはない、主義や見解が自分のほうから、彼のところへやってくるのであつた。それはちょうど、彼が帽子や上着の型を選ばないで、みんなのかぶっているのをかう、それと同じであつた。ところで、見解をもつというものは、彼のごとく一定の社会に住み、ふつう中年に達したところに発達する一種の思想活動の要求を感じている人間にとっては、帽子を持つと同様に必須事である。どうして彼が、自分と同じ社会の人々も支持する人の多い保守主義の代りに、自由主義を選んだかということについて、もしも何か

理由があるとするれば、それは彼が自由主義をより合理的であると感じたからではなく、このほうが自分の生活形式によりふさわしいからであつた。自由党は、ロシアでは何もかも悪いといつていたが、なるほどオプロンスキイは借財がたくさんあつて、金にひどく不自由していた。自由党のいわく、結婚は古い廃れた制度であるから、ぜひとも改造しなければならぬ、と。全く家庭生活はオプロンスキイにたいした満足を与えず、嘘をついたり仮面をかぶつたりさせた(が、そんなことは彼の性質としていまわしいものであつた)。自由党のいわく、というよりも、むしろ暗示したのであるが、宗教は国民の中の野蛮な一部にとつて鬱にすぎない、と。実際オプロンスキイは短い祈禱式でさえも、足の痛みを我慢して立つている始末で、いったいこんな恐ろしいか仰々しい来世の言葉が何の役に立つのか、合点がいかなくなつた。彼にとつては、この世の生活だつてきわめて快適だったのである。それと同時に、愉快な洒落が好きなオプロンスキイは、もし種族を誇りたいなら、リューリックを固執して、人類の始祖たる猿類を否定する法はない、などといつて、おとなしい人間のどぎもを抜くことを、時に快としていた。こういうわけで、自由主義はオプロンスキイにとって、習慣となつてしまつた。で、食後の葉巻と同じように、自分の購読している新聞を愛した。なぜなら、彼の頭に軽いもやもやを生み出してくれるからであつた。彼は今日の社説を読んだが、それにはこんなことが説明してあつ

た。いま世間で過激主義がいっさいの保守的要素をのみつくすから、政府は革命という怪物を鎮圧すべく、ありとあらゆる手段を講じなければならぬ、といったような悲鳴がもちあがつている。が、それはまちがいであつて、むしろ反対に、『吾人の見解に従へば、危険は偽装せられたる革命の怪物に非ずして、進歩を阻止する伝統の頑迷に存するのである。云々』

彼はもう一つ財政関係の論文も読んだ。それにはベンサムとミルのことが書いてあつて、大蔵省をちくりとやつていた。彼は持ち前の勘のよさで、一つ一つの皮肉の意味がわかつた。だが、だれに向けて、どういう件で、この針を刺したのか、といったふうである。で、これもいつものごとく、彼にある程度の満足を与えた。しかし今日は、マトリョーナの忠告や、家の中がひどくごたごたしていることを思い出すと、せつかくの満足感がそこなわれた。それから、バイスト伯がヴィスバーデンへ到着したとの風説である、というニュースを読み、今後もはや白髪はなくなるという広告や、軽装馬車売られたとか、妙齢の婦人の職を求む、などという案内欄にまで目を通したが、こういつた記事も、以前のように、静かな皮肉の満足感を与えてくれない。

新聞を読み終え、二杯目のコーヒーを飲んでしまひ、パタツキのパンを食べ終ると、彼は立ちあがつて、パンの粉をチョッキから払い落し、広い胸をぐつと張つて、うれしそうにやりと笑つたが、それは心の中が特別うきうきしてい

たからではない——うれしそうな微笑を呼び出したのは、消化のよい胃の腑であった。

しかし、この喜ばしげな微笑は、とたんにいっさいのことを思い出させた。で、彼は考えこんでしまった。

二人の子供の声が（オプロンスキイは末の男の子のグリーンシャと、長女のターニヤの声を聞きわけた）、戸の前で聞えた。二人は何かを曳きずってきて、落したのである。

「だから、屋根の上にお客さまを乗せちゃだめっていったじゃないの」と女の子は英語で叫んだ。「さあ、拾いなさいよ！」

『何もかもごっちゃごちゃだ』とオプロンスキイは考えた。『あのとおりに、子供たちはかかってに飛びまわってる』彼は戸口までいって二人を呼んだ。二人は汽車にしてあった箱をおっぱり出して、食堂へ入った。

父親の秘蔵っ子であるターニヤは、勇敢に入ってきて、いきなり抱きつくと、いつものように笑いながら頭つ玉にぶらさがり、父親の頬髯から発散するなじみの深い香水の匂いを楽しむのであった。そして最後に、かがんでいるために赤くなりながらも、優しい愛情に輝く父の顔を接吻した後、女の子は両手をはなして、駆け出そうとした。が、父はそれをひき止めた。

「どうだね、ママは？」娘の滑らかな優しい頸筋を撫でながら、彼はこうきいた。「お早う」と、朝のあいさつをする男の子に笑顔を見せながらいった。

彼は、この男の子を愛する自分の気持が足り

ないのを自覚していたので、いつも平等にしようとしていた。けれども、男の子はそれを感じて、父親の冷たい笑顔に微笑をもって応えなかった。

「ママ？ 起きたわ」と娘は答えた。

オプロンスキイはため息をついた。

『してみると、またひと晩じゅう寝なかつたんだな』と彼は考えた。

「どう、ママはきげんがいいかい？」

女の子は、両親の間に争いがあって、ママはきげんよくしていられない、そしてパパもそのことを知っているにきまってるくせに、それを軽々しくきくのは白を切っているのだ、ということを知っていた。で、父親のために顔を赤くしなければならなかった。父親のほうでもたちまちそれを見てとって、同じように赤面した。

「知らないわ」とターニヤはいった。「ママは勉強なさいとおっしゃらないで、ミス・グートルといっしょに、散歩かたがたお祖母さまのところへいらつしやいて、そうおっしゃったわ」

「じゃ、おいで、タンチェーロチカ。ああ、そうだ、お待ち」やはり娘をおしとどめて、その華奢な小さい手で撫でながら、彼はこういった。彼は壁炉の上から、昨夜かたがたお菓子箱をとって、チェコレートのとポマードのと、ターニヤの好きなのを二つやった。

「グリーンシャの分？」と女の子はチェコレートのほうを指しながらたずねた。

「そう、そう」それからまた娘の肩を撫で、髪の毛もと頸筋に接吻して、やつとはなしてや

った。

「お馬車の用意ができました」とマトウェイがいった。「それから、ご婦人のお客さまがいらつしやいます」とつけ加えた。

「前からかお？」オプロンスキイはたずねた。

「かれこれ三十分ばかり前で」

「すぐに取り次がなくちやいかんと、何度いったか知れないじゃないか！」

「だって、旦那さまもせめてコーヒーくらいおあがりにならなくちゃ」とマトウェイはさも友だちらしくぞんざいな調子でいったが、それに対して腹をたてるわけにはいかなかった。であった。「まあ、早くお通ししろ」いまいまして顔をしかめながら、オプロンスキイはこういった。

訪問客は二等大尉夫人カリニナといたが、その依頼はわけのわからぬ、できない相談なのであった。しかし、オプロンスキイは、日ごろの習わしで席に着かせ、横から口を入れないで注意ぶかく話を聞いたあと、だれに、どんなふうに関心だらいいかと、こまごました忠告を与えたばかりか、彼女の力になってくれた人物にあてた紹介状を、大きく縦長な、美しくつきりした筆蹟で、元氣よくみごとに書いてやった。二等大尉夫人を帰すと、オプロンスキイは帽子を手にとり、何か忘れたことはないかと考えながら、ちょっと足をとめた。が、やはり何も忘れたものはなかった。忘れたかと思っっていること——妻のこと以外には。

『ああそうだ！』彼は頭をたれた。と、その美しい顔は悩ましげな表情になった。『行ったも

のか、それとも？」と彼はひとりごちた。すると、内部の声はこんなことをささやいた、行く必要はない、そんなことをしたって、まやかしのものは何一つありえないのだ、二人の関係を旧に戻したり、とりつくろつたりすることは不可能である。なぜなら、妻をもういちど魅力のある、愛情をそそるような女にすることも彼自身を愛に無能力な老人にすることもできないからである。今となつては、まやかしの虚偽のほか、なんの結果も得られるはずがない。ところで、まやかしの虚偽は彼の気性として、いまわしいものなのである。

『とはいふものの、いつかはなんとかしなくちゃならない。だって、このままですすむわけにはいかないじゃないか』自分で自分に勇気をつけようと努力しながら、彼はこういつた。そこで、ぐっと胸を張り、タバコをとりだして吸いつけ、二度ばかりぱつぱつとやったあと、真珠貝の灰皿へほうり投げ、足早に客間を通りぬけて、妻の寢室へ通ずるもう一つの戸を開けた。

III

ダーリヤ・アレクサンドロヴナは短い上衣を着、かつては濃くふさふさとしていたが、今ではもう薄くなった髪をピンでうしろ頭に留め、やせてげっそりこけた顔に、おびえたような目ばかりを大きく自立たせながら、部屋じゅうと散らした荷物の中で、衣装戸棚の蓋を開け、その中から何やら選り出して来た。良人の足音を聞きつけると、戸口の方を見て手を休め、

自分の顔に敵しい、ばかにしたような表情を与えようと、むなししい努力をした。良人を恐れ、目前に迫つた顔合わせを恐れているのを、自分でも感じていた。彼女はこの三日間にもはや十度も試みたことを、もういちど試みているところであった。ほかでもない、自分と子供らのものを選び分けて、母親のところへ運ぼうというのであったが、やっぱりそれも思ひきつてできなかった。しかし、今も前と同じように、これはこのままには棄てておけない、何かの方法を講じて良人を罰し、面皮を剥ぎ、自分の受けた苦痛のせめて何分の一かでも、良人に復讐しなければならぬ、と自分で自分にいい聞かせていた。彼女は相も変わらず、この家を出て行くのだといながらも、それが不可能なのを感じていた。それが不可能なわけは、彼を自分の良人と考え慣れ、愛し慣れた気持を、棄ててしまうことができないからであった。のみならず、ここで、この家で五人の子供のせわをするのがや

つとこさであつてみれば、一同をひきつれて移ろうとしている里方では、なおさら子供らが不自由をするに相違ない。それを彼女は直感したのである。それでなくてさえ、わるい肉汁をやつたために、末の男の子が病氣になつたし、ほかの子供らは昨日ろくろく食事らしい食事をしなかつたではないか。出て行くのは不可能だ、と彼女は感じた。にもかかわらず、自分で自分を騙しながら、相変らず荷物をよりわけつつ、本当に出て行くようなふりをしていたのである。良人の姿が目に入ると、彼女は手箱の引出し

に手をつこんで、何かさがしているようなかっこうをした。彼が妻のそばへちかちかとよつてきたとき、はじめて彼女はそのほうをふりかえつて見た。しかし、彼女が敵しい断乎たる表情を与えようとしているその顔は、途方にくれた、さも苦しげな表情を浮べていた。

「ドリイ！」と彼は静かな臆病らしい声でいった。彼は首を肩の間へすくめて、さもあわれっぽいおとなしい様子をしようと思つたが、それでもやはり、その体からはさわやかな健康の気が発散していた。ドリイは、さわやかな健康美に輝く良人を、ちらりと頭から足の爪先まで見まわした。

『そうなんだわ、この人は幸福で、満足しきつているんだわ』と彼女は考えた。『ところが、わたしは？……それに、あのいやらしい人の善さ、みんなはそのためにあの人を好いて、ほめてくれるけれども、わたしはこの人の善さが憎らしい』と彼女は考えた。と、その口が歪んで、蒼ざめた神経的な顔は、右の片頬の筋肉をびくびくとふるわせた。

「何ご用ですの？」と彼女は借りもののような、胸の奥から出るような声で、早口にこういつた。「ドリイ！」と彼はふるえをおびた声でくりかえした。「アンナが今日やってくるんだよ」

「それがどうしたんですの？ わたしは会うわけにはまいりません！」と彼女は叫んだ。

「しかし、なんといつたって、ドリイ……」

「行つて下さい、行つて下さい、行つて下さい！」良人のほうを見ないで、彼女はこう叫ん

だが、その叫びはまるで肉体的苦痛から出たものようであった。

オブロンスキイは、さっき妻のことを考えている間は、心の平静を保って、マトヴェイの言葉を借りると、なにもかも丸くおさまると期待し、おちつきはらって新聞を読み、コーヒを飲むこともできた。が、妻の憔悴した受難者のような顔を見、運命にまかせたような自暴半分の声を聞いた時、彼は息がつまり、なにかしら喉もとにせぐりあげて、眼は涙に光りはじめた。「ああ、おれはなんてことをしたんだろう！ドレイ！ お願いだ！……だつて……」彼は言葉をつづけることができなかつた、慟哭は喉につかえた。

ドレイは衣裳戸棚の蓋をばたんと閉めて、良人の顔を見た。

「ドレイ、おれに何をいうことができよう？……ただ一つ、赦してくれというよりない……まあ、思い出してくれ、いったい九年間の夫婦生活が……ほんの一時のなにを……あがなうことはできないものだろうか……」

ドレイは眼を伏せて、良人が何をいうかと待ちながら、聞いていた。それはさながら、どうかしてわたしの考え違いを正してもらいたい、と祈っているようであった。

「その、ほんの一時の浮気をあがなうことは……」といききつて、その先をつづけようと思つた。と、この一語を聞くと同時に、ドレイの唇はさながら肉体的な痛みでも感じたように、ぎゅつと緊り、または右の頬の筋肉が躍つた。

「行つて下さい、ここを出ていって下さい！」と彼女は前よりもげしく刺すような声で叫んだ。「あなたの浮気だのなんだのと、けがらわしい話をしないで下さい」

彼女は出て行くとしたが、思わずよろよろとして、椅子の背につかまってもたれた。良人の顔はひろがり、唇は脹れ、眼は涙でいっぱいになった。

「ドレイ！」と彼はもうすすりあげながらいった。「後生だから、子供のことを考えてくれ、子供らに罪はないんだから！ 罪はおれにある、だから罰してくれ、罪滅ぼしをするように命令してくれ。おれにできることなら、なんでもする覚悟だ！ おれが悪かつた、どれほど悪かつたか、言葉につくせないくらいだ。しかし、ドレイ赦してくれ！」

ドレイは腰をおろした。良人は彼女の大きな重々しい息づかいを聞いて、名状しがたい憐愍を覚えた。彼女は幾度か口をきろうとしたが、舌がいうことをきかなかつた。良人は待つていた。

「あなたが子供のことを覚えてらっしゃるのは、いっしょに遊びたいからでしょう。ところが、わたしはね、子供らがだめになつただけ知つています、覚えています」と彼女はいつたが、それはどうやら、この三日間いくたびも腹の中心でくりかえした文句の一つらしかつた。

彼女は良人に『あなた』といつた。で、良人は感謝の色を浮べて妻を見やり、その手をとろうとしたが、妻は嫌悪のさまで身をよけた。

「わたしは子供たちのことを覚えています。だから、子供たちを救うためには、この世でできるだけのことはなんでもしたいんですけど、どうしたら救えるかわかりませんの。父親の家から連れ出したものか、それとも放埒な父親の手もとに残したものか。——そうですわ、放埒な父親ですとも……ねえ、考えてもごらん下さい、あんな……ことがあつたあとで、わたしがいっしょに暮せるかどうか？ いつたいそんなことができるとお思ひですの？ さあ、いって下さい、そんなことができるかどうか？」と彼女はしだいに声を高めながら、こうくりかえしが、「わたしの良人が、わたしの子供らの父親だ。自分の子供らの家庭教師と恋愛関係になつたそのあとで……」

「でも、どうしたらいいの？ いつたいどうしたら？」自分でもなんといつたらいいのかわからず、しだいに低く首をたれながら、彼はあわれっぽい声でこういつた。

「わたしあなたみたいな人はけがらわしい、いやらしい！」と妻はいよいよのぼせながら叫んだ。

「あなたの涙なんか、水と同じですわ！ あなたは、一度もわたしを愛したことなんかありません！ あなたという人には心もなければ、潔白なところもないんです！ あなたなんかいやらしい、けがらわしい。あなたは赤の他人です、縁もゆかりもない赤の他人です！」自分にとつて恐ろしい他人というこの一語を、彼女は痛みと憎悪をこめて口に出した。

彼は妻を見やった。と、その顔に現われた憎悪は、彼をおびやかし驚かした。彼は、自分の憐愍が妻をいらだたせたことを理解しなかつたのである。彼女が良人に認めたのは憐愍であつて、愛ではなかつた。「いや、あれはおれを憎んでいる。こいつは赦しちゃうれない」と彼は考えた。

「これは恐ろしい、恐ろしい！」と彼は口走つた。

この時、隣の部屋で、おそらく転んだのである、赤ん坊がわつと泣いた。ダーリヤ・アレクサンドロヴナはじつと耳を澄ました。その顔は急に和らいだ。

彼女は見つけたところ、自分がどこにいるかを、何をしたのかわからない様子で、しばらくわねに返りかねていたが、急に立ちあがって、戸口のほうへ行きかけた。

『だって、あれはおれの子を愛しているんじゃないか』赤ん坊の泣き声を聞いたとたんに、妻の顔つきが変つたのに気がついて、彼はこう考えた。「おれの子を、それなのに、どうしておれを憎むことができるんだらう?」

「ドリイ、もうひと言いたいことが」と彼は妻のあとからついていきながら、声をかけた。

「もしわたしのあとからついていらつしやれば、わたし召使を呼びますよ、子供たちを呼びますよ! あなたが極道者だつてことを、みんなに知らせますから! わたしは今日すぐ出ていきますから、あなたはここでご自分の色女といつしよにお暮しなさいまし!」

そういつて、彼女は戸をばたんと閉めて、出ていった。

オプロンスキイはほつとため息をつき、顔を拭いて、静かな足どりで部屋を出ようとした。

『マトヴェイは丸くおさまるといふが、どんなふうにおさまるんだらう? おれにはそんなことができそうにも思われん。ああ、ああ、恐ろしい! それに、あれのはしたないわめきようはどうだらう』極道者、色女という妻の叫びを思い起しながら、彼はこうひとりごちた。『ひよつとしたら、女中どもが聞いたかもしれない! 実にはしたない、恐ろしいこつた』オプロンスキイはしばらくたずんでしたが、やがて眼を拭い、ほつとため息をつき、ぐつと胸を張つて、部屋を出た。

ちやうど金曜日で、食堂ではドイツ人の時計屋が、時計を巻いていた。オプロンスキイは、この几帳面な禿頭の時計屋のことで、洒落をいふことを思い出した。『あのドイツ人は時計を巻くために、自分でも一生ゆるまんようになねじを巻かれてるんだよ』彼はにやつと笑つた。

オプロンスキイは気のきいた洒落が好きなのであつた。『もしかししたら、丸くおさまるかもしれん! 丸くおさまる、いい言葉だな』と彼は考えるのであつた。『これは一つ話してやろう』「マトヴェイ」と彼は叫んだ。「じゃ、おまえマリヤといつしよに、その長椅子部屋に、アンナ・アルカージエヴナをお入れするように、万事宜してくれ! 姿を現わしたマトヴェイにそういつた。

「かしこまりました」

オプロンスキイは毛皮外套をまとい、入口階段へ出た。

「お食事はお宅でなさいますか?」と見送りに出たマトヴェイがたずねた。

「出たところ勝負さ。さあ、これを当座の費用にとつておけ」紙入れから十ルーブリ紙幣をぬき出して、彼はこういつた。「足りるかい?」

「足りるにも足りないにも、まにあわせなくちやなりませんまいよ」馬車の戸をばたりと閉めて、入口階段へ身をひきながら、マトヴェイは答えた。

その間に子供をなだめたダーリヤ・アレクサンドロヴナは、馬車の響きで良人が外出したことを知り、また寢室へ戻つた。それは彼女にとって唯一の避難所で、ここを一步出るとすぐ、家政の雑事にとりまかれるのであつた。今もちよつと子供部屋まで出ていったわずかの間に、イギリス婦人とマトリョーナ・フィリモノヴナは、いくつかのつびきならぬ相談をもつてきたが、それは『お子さまがたには散歩のとき何をお着せたいかしらう?』とか、『牛乳をさしあげたものでございませうか?』とか、『代りの料理人を呼びにやらなくつてよろしうございませうか?』などといつたような、彼女でなければ返事ができないことなのであつた。

「ああ、もううっちゃつといつてちやうだい、わたしにかまわないで!」と彼女はいい、寢室へ帰つて、良人と話したその場所に腰をおろ

